

西川一三「秘境西域八年の潜行」を描いた沢木耕太郎「天路の旅人」 (その4)

八柳 修之

ラサ〜インド〜そして帰国へ

ラサに辿り着いた後、2人はガリンポンに戻り、木村が世話になっていたチベット新聞社社長宅に世話になることになった。ここで木村は報告書、西川は1mほどのカム地方の地図を書き、英国諜報機関に提出し報酬を貰った。木村は新聞社を辞めラサとカリンポンの間の行商をすることになった。一方、西川の地図作成能力を見込んだ社長から「チベット全図」の作成を求められ記憶をもとに作成した。その後、新聞社の下働きをし、夜はインド語を猛勉強した。社長はロブサン働きぶり与人柄を気に入り、嫁を世話するからカリンポンに落ち着くように執拗に進められ心も動いた。しかし密偵としての任務が終わり自由の身、全仏教徒の聖地であるブッタガヤ、クシナガラ、ルンビニの三大聖地への巡礼をしたいという気持ちが勝った。惜しまれつつ退職、ガリンポンの丘の上にある寺で修行僧として御詠歌を習い苦行僧として「ルン」を授かる。三か月の修行によって、自在に御詠歌を詠えることが出来、どうにかインド放浪の準備ができた。秋の終わり、聖地ブッタガヤなど巡礼を望んでいた修行で知り合った3人の修行僧とカルカッタ向け出発した。今度は汽車、修行僧姿で捕まったときはご詠歌を唱え無賃乗車で、カルカッタを経て**ブッタガヤ**に到着。恐ろしく荒れ果てていたという印象を受けた。その後、仏陀の三大聖地、**ラージギル**と**サルナート**を訪れた。いずれの托鉢と無賃乗車、宿泊はビルマ寺、そのあと残り惜しく3人と別れた。



ブッタガヤ



ラージギル



サルナート

西川の次の目的地は祇園精舎だった。これから先は托鉢の旅であったが、信心深い人が多くこれまでにない楽な旅であった。蒙古、中国や朝鮮の歌を歌い、しまいには日本の唱歌まで歌わなくてはならぬほどだった。ナウガル駅から無賃乗車し、祇園精舎の最寄駅**バルランブル**で下車、**祇園精舎**はほとんど廃墟と化していた。しかし、ここの人々は温かい人が多く、チベットや蒙古の話聞きたがり、引っ張りだこの歓待を受けた。バルランブルからラクナウまで無賃乗車、そこでインド独立のため日本軍と行動したインド人将校達から日本語で話しかけられ歓待され、アグラまで一緒した。1948年12月31日、大晦日であった。アグラではタージマール宮殿を見学。デリーのビルラ寺の庭園（日本の建築技師設計の小さな仏教寺院あり）ではインドの大富豪に会い歓待され10日も滞在した上、100ルピーもの餞別までもらった。



祇園精舎



タージマール宮殿



デリーのビルラ寺

その後、デリーから**アムリトルサル**（パキスタン国境の町）からカシミールに行き、さらにパキスタンを抜けアフガニスタンに潜入したいという願望が高まった。デリーから 2 日後アムリトルサルに着いた。ここはシク族の故郷、シク教の中心都市でシク教の大本山は寝食に心配のない楽土のようなところであったが、そこでカシミールでインドとパキスタンに間で激しい戦闘が起きていることを知り、パキスタンからアフガニスタンに抜けようという夢は破られた。状況を見極めるべくアムリトルサルから、北東ヒマラヤ山麓下のジョジンダーナガールへ無賃乗車。そこで警察に逮捕されてしまった。パキスタンのスパイ容疑である。所持していた各国語による本、辞書が証拠とされた。署長は話の分かる人で西川のこれまでの巡礼の旅を聞き了解し、逆にパキスタンを抜けてアフガニスタンへ行くことは不可能、蒙古に戻りなさいと諭された。それなら未だ鎖国を続けているネパールへ行くことに決意した。



アムリトルサル



チャンドラギリ峠



ネパール全図

留置場を出た西川はカシミールの目的地であるレサワールのラマ廟を訪れたあと、レサワールから托鉢しながら歩き半月後にバルランブルに戻りネパール語を学び、5 月ネパール潜入の旅に出発した。無賃乗車を繰り返して、インドからネパールのカトマンズに向かう表玄関ラクソールに着いた。軽便鉄道もあったが無賃乗車が難しそうだった。終着駅まで約 120 kmと聞き歩いて行くことにした。終着駅からは普通トラックを利用するということがあったが、歩いて行くことにした。土地の風景から人々の姿形までよく日本と日本人に似ていることに驚かされた。第一の峠、チサパニギリからは眼前に白雪をいだいたヒマラヤの大雪山嶺が広がっていた。やがて、カトマンズの手前、大塔村に到着、ここをベースにカトマンズ盆地の仏跡地めぐりをした。2 カ月を過ごした。

7 月となりインドのカリンボンに行くこととした。徒歩でのチャンドラギリとチサパニギリの峠越えに苦しんだ。カリンボンで蒙古人の巡礼者から木村がラサで元気にくらしているという噂、ビルマ政府がネパール人に移民の門戸を開いたこと、カルカッタとアッサムを結ぶ鉄道工事で苦力を募集しているという話を聞いた。

西川はビルマに行く前に英蔵辞典を入手しておきたかった。今度は乗合自動車と汽車を使ってカルカッタまで行ったが 30 ルピー不足した。駅前の食堂で一日 2.5 ルピーの仕事があると聞き、いったんカリンボンに戻り、そこから工事現場まで行き採用された。仕事は石や砂利を運び堤防を築くことで宿舎も用意されていた。西川は真面目に仕事した。5 時以降は自由であったから夜はランプの光で本を読み、語学の勉強をした。その姿は監督や会社幹部から好意を寄せられ信用されるようになった。10 月、インドの正月休み、警察がやって来て逮捕されカルカッタの警察に護送された。

なんとそこには木村がいた。木村が白状したのだった。木村は帰国したいあまり自ら警察に飛び込み西川のこと話したという。西川はそれを聞いて唾然とした。どうして「飛び込む」前に自分の意思を確かめてくれなかったのだろうと、これがのち木村に対するわだかまりとなったようである。「日本に向かう船の手当てが出来たら迎えにくる」といわれ、刑務所に移された。

半年後の 1950 年（昭和 25）5 月 12 日、英国船籍の貨客船で、カルカッタを出港、6 月、神戸に着いた。足掛け 8 年、このとき数え 26 歳、内蒙古出発した西川は数えで 33 歳になっていた。